滋賀文化財だより
NO. 132
1988. 9. 30
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

159. 野洲町小堤遺跡
出土の中世木製品

はじめに

『昭和62年度野洲町内遺跡発掘調査概要』「第4章小堤・大篠原南遺跡」[1]の中で報告した第12トレンチＳＸ－01と第20トレンチＳＫ－01出土の中世木製品について、その後の調査によって新たに確認したことを踏まえて内容を一部訂正しなければならず、そこで本誌上を借りて資料紹介として詳しく再報告したい。

遺跡の概要

小堤遺跡は、野洲町大字小堤の東南に位置する城山（288m）から伸びた丘陵の緩斜面に立地している。周辺の遺跡には、同じ丘陵に吉祥寺古墳群、その西には吉祥寺跡さらに山頂に中世城郭がある。現在の小堤集落の中を中山道が通っている。昭和61年度から小堤土地改良事業に伴う発掘調査が始まり、6世紀末の土器溜まり・掘立柱建物群、16世紀～17世紀初頭の館に関連する遺物・遺構が発見された。62年度の調査では上ノ市川沿いの扇状地を調査したために殆ど遺構は検出されなかった。

第12トレンチ－ＳＸ－01出土木製品

ＳＸ－01の規模は長径 2.8m、短径 2.4m、深さ80cmを測り、平面形は長円形を呈している。集水遺構と考えられ、最下層は植物腐食層であった。出土した木製品は13世紀中葉の黒色土器（森編年Ⅲ－1）[2]を伴っている。図1－1は上部が欠損しているが、中央を切り込みホゾ状に加工している所から、差し込み式の下駄の銀杏歯と考えられ、板目材を使用している。2は杭の先端、3・4は楔状木製品である。

第20トレンチ－ＳＫ－01出土木製品

このトレンチは字名が御屋敷田と呼ばれ、南に稲荷神社が隣接して鎮座いる。また、周囲が土塁状の高まり（水路）によって囲まれていたために、当初近世屋敷の存在が予測された。

ＳＫ－01の規模は長径2.9m、短径2.5m、深さ 160cmを測り、平面形は楕円形を呈する。井戸状遺構と考えられるが底で5ヶ所竹管を確認したところから井戸と集水施設の機能を合わせ持った遺構であると推測される。出土した木製品は15世紀頃～17世紀の大量の土師皿や陶磁器の破片、木片を伴っている。図2－1は人形で頭部に角髪（みずら）の表現がある。腕部は既に失われている為、細部は不明であるが胴体部、2ヵ所に貫孔が穿たれ腕部を差し込んでいたと見られる。寸法は、全長10.5cm、頭部幅4.3cm、胴体部3.6cm、厚み1.4cmで顔部には目と口の表現が見られる。図3－10は連歯下駄でミニチュア化しており鼻緒を通す穴が3ヵ所に穿たれている。後緒穴が左側にややあがりぎみである。歯の形態は短く幅が台からはみ出ない。寸法は、台の全長8.3cm、幅2.8cm、高さ 1.8cmで隅丸長方形である。図3－14は有孔円盤状木製品で軸が残っており、円盤に墨画きで円を描いている。この木製品は、紡錘車のミニチュアか独楽であると考えられる。寸法は、径 4.8cm、厚さ5mmである。図2－3は草履状木製品で2つで一組である。全長23.8cm、最大幅10.8cm、厚さ2mmである。形状は先端部・側縁前方部・後端は直線的で、側縁後方部は丸味をもって張り出している。[3]表面には植物繊維が付着しており、編物状になっていた。箸状木製品が出土しており、完形品を見ると両端が尖り、面取は四面と多面があり、全長は19cmである。

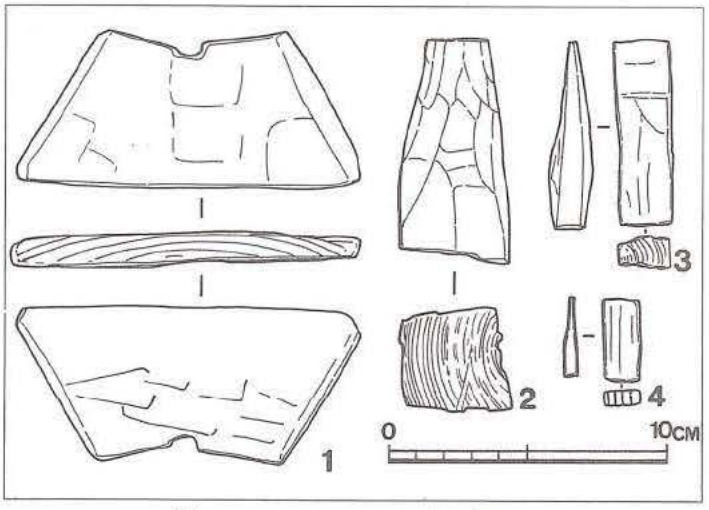


図1　T－12　ＳＸ－01出土木製品

これらの出土遺物の中で、人形は他に類例が無く、類似したものとして石川県桜町遺跡２号井戸出土の人形（図２－２）が挙げられる。この人形はヒノキ？の枝を輪切りにした頭部のみ出土した。顔面で長さ4.1cm、幅 4.2cmで頸、耳、頭頂部に貫孔が見られ、組み合わせの人形であった可能性がある。また箸状木製品が５本出土しており、祭祀の可能性を指摘している。[4] ミニチュアの下駄については、人形と同じ桜町遺跡のＳＤ－01から小型の連歯下駄(図３－11)が出土している。寸法は台の全長 9.5cm、中央幅5.05cm、高さ 1.0cmを測る。歯の形態は短く幅が台からはみ出ない。後緒穴の左側がやや上がりぎみである。[5] もう１例、能登川町今安楽寺遺跡Ⅲ次調査Ｔ・５　ＳＢ01　Ｐ４から小型の連歯下駄（図３－12）が出土している。寸法は台の全長12.9cm、幅7.3cm、高さ3.6cmを測る。歯の形態は短く幅が広く作られている。後緒穴の右側がやや上がりぎみである。報文では使用痕が認められるが、歯の摩滅が認められないことから使用された期間は短いと推定されている。[6] 小堤遺跡の例を含めて３例とも小型で実用に耐え難く、儀式用にミニチュア化したものと考えられる。実用品と考えられる、同じ小堤遺跡の下駄（図３－13）[7]に見られるような後緒穴は水平方向に穿たれるものが多く、ミニチュアの下駄の後緒穴が左上がりなのが注目される。

草履状木製品は、『板草履』『履物状木製品』とも呼ばれ、民俗学では『板金剛草履』と呼ばれている。草履状木製品は２枚の薄板を芯板にして藁や藺草を編みこれに鼻緒を付けた履物と考えられ、[8] 草戸千軒町遺跡・諏訪東遺跡[9]では、鼻緒のついた状態で発見されていることから履物として使用されたのは確実である。草履状木製品について、日本はきもの博物館の潮田哲雄氏が草履状木製品の特徴を草戸千軒町遺跡の出土遺物から次のように指適している。「(1)材質は杉か檜木で板目と柾目がある。(2)横編み材は藁と藺草を横８字編みする。(3)四周に編返しによる縁飾りがある。(4)上が藁か藺草の表、中心が板、裏に藁草履を別に取り付けてある。(5)前緒孔はないが先端に小孔２ヶ所有。」[10]

滋賀県では近江八幡市柿木原遺跡ＳＥ－1906から13世紀後半の板草履（図２－４・５）として報された例があり、共伴遺物に羽釜、常滑練鉢がある。[11] 滋賀県下では本例で２例目の出土と考えられ、近くでは大阪府長曽根遺跡、忍ヶ丘駅前遺跡（図２－６～９）[12]から出土している。分布は九州は太宰府から東北は山形県城輪柵跡で出土[13]し、ほぼ全国に広がって、特に草戸千軒遺跡や鎌倉市の幾つかの遺跡で多数出土している。

まとめ

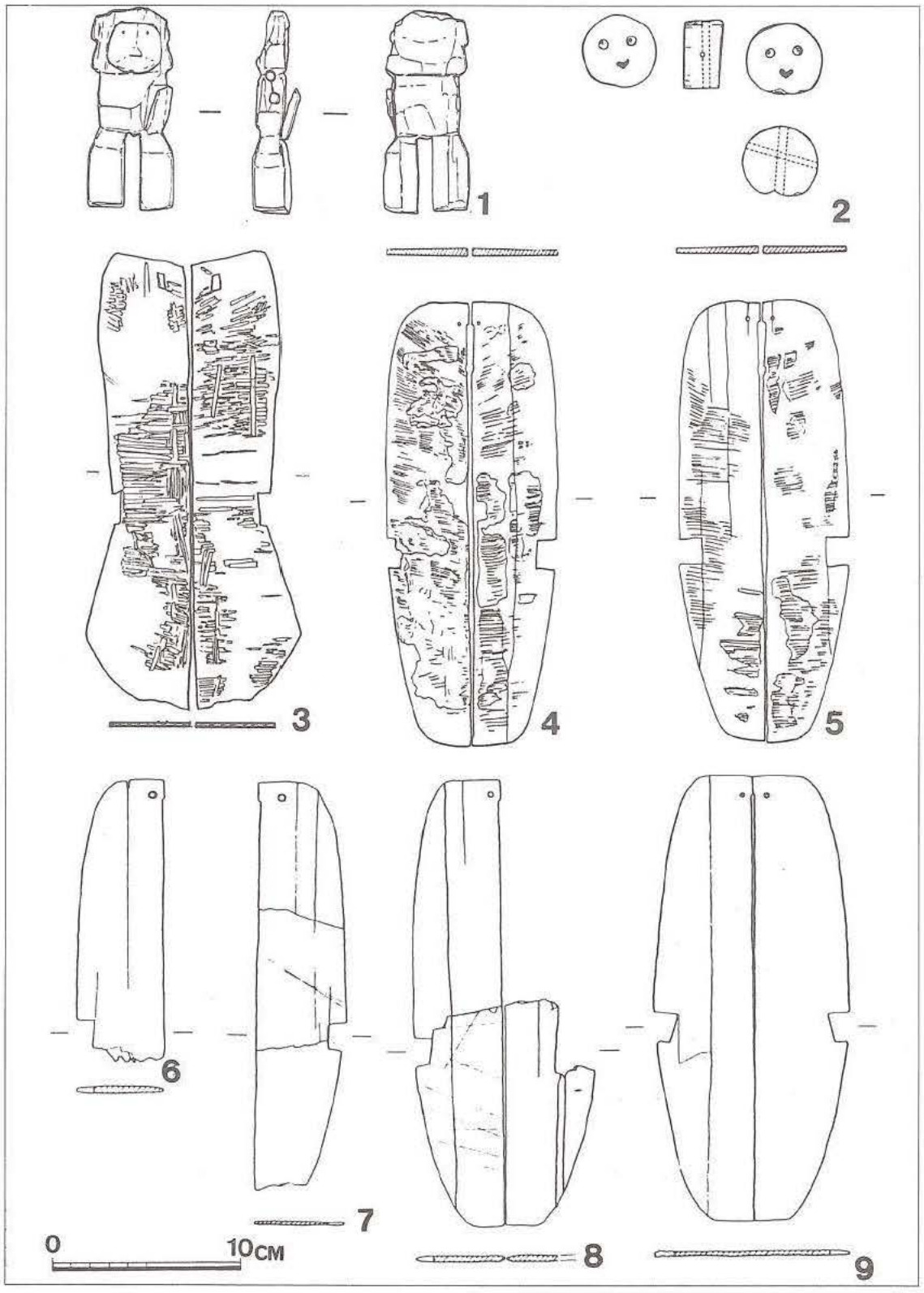
中世の祭祀遺物については現在のところ板塔婆や柿経、笹塔婆、転読札、呪符や呪いのための人形など、呪術資料は数多く発見されている。石川県桜町遺跡では既に紹介した遺物の他に、土坑３の箸状木製品の層の下から馬形木製品が、土坑１の人頭大の石を詰め込んだ下から箸状木製品、多くの灯明皿、杓子、珠洲焼き、菊花文木破片などを伴って呪文札が出土している。馬形木製品は祈雨、止雨祈願のような土馬をつかった古代祭祀の延長上にあると考えられている。[14]

小堤遺跡の例は隣接する稲荷神社と関係の深い祭祀であることは推測できる。多くの土師皿と箸状木製品を伴うことで供膳、供食が行われていたと考えられ、桃種？も出土している。草履状木製品（板金剛草履）から儀式的なことが行われていたと推測される。人形は古墳時代の風俗を表しており、記紀などの神話の世界の先祖神たち（日本武尊命、須佐乃呼命等）を表し、おそらく神体（憑り代）として取り扱われたのであろう、ミニチュアの下駄、紡錘車は神体に捧げられた供物であろう。これらから大胆に推測するならば灯明皿が多数出土する例として地鎮祭が考えられる。おそらくは神社の造営か子字名とおり屋敷の建築に伴う地鎮祭ではないだろうか。よく似た例として奈良県福地城跡で14世紀末のピットから白磁、青磁片、銅銭（大観通宝）と伴に270枚の土師皿が出土しており、地鎮祭等の祭祀関係の遺構としていることから、[15] ＳＫ－01出土の木製品は、地鎮祭（鎮壇具）の類いではないかと推測する。ただ問題となるのは、ＳＫ－01の土層断面の観察により２度の廃棄行為を確認している点である。

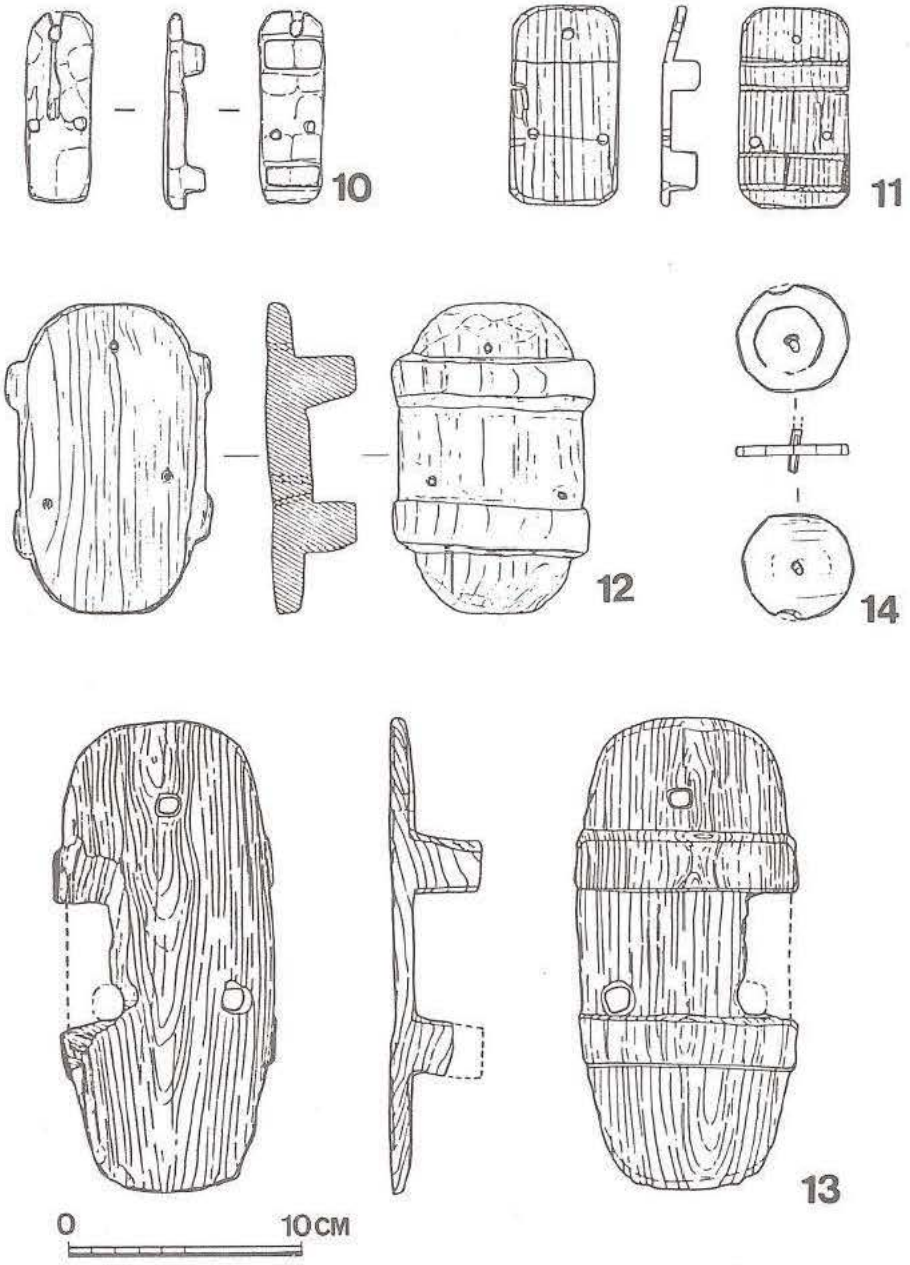
仏教文化（神仏習合）の影響により祭祀の対象が自然への信仰（山岳、巨石、島、気象現象等）であったのが馬の奉納儀礼や偶像への儀礼が現れる。とくに偶像（神像）は仏像の影響を強く受けて成立したと考えられる。木像を神体（憑り代）としている例として、野洲町久野部大行事神社の本殿男神像１体、女神像１体、童児像２体（いずれも簡素な１木造り）狛犬？像１体が安置されている。像の製作年代については、本殿外にあった狛犬像が鎌倉時代の作と考えられていることから同時期のものと考えられる。建部神社の女神像（像高38cm）は下方が腐蝕によって欠損して全体像は不明であるが羞じらいの感情を示している。同社にはもう２体の女神像（像高34.6cm・20.4cm）がある。製作年代は1224年と推定されている。[16] 水口神社にも女神像（像高23.7cm）が知られている。[17] 中世では憑り代としての神像への儀礼がかなり多く行われていたのではないだろうか。

最後に草履状木製品、ミニチュア下駄、人形についてご教授を賜った日本はきもの博物館の市田京子氏、四條畷市教育委員会の野島稔氏の他、同僚である吉川和則氏、花田勝広氏、森隆氏に感謝の意を表したい。

（野洲町教育委員会　杉本　源造）



図－2



1．小堤遺跡（ＳＫ－01）
2．桜町遺跡
3．小堤遺跡（ＳＫ－01）
4．柿原遺跡
5．柿原遺跡
6．忍ヶ丘駅前遺跡
7．忍ヶ丘駅前遺跡
8．忍ヶ丘駅前遺跡
9．忍ヶ丘駅前遺跡
10．小堤遺跡（ＳＫ－01）
11．桜町遺跡
12．今安楽寺
13．小堤遺跡（61年度出土）
14．小堤遺跡（ＳＫ－01）

図－3

注

① 『昭和62年度野洲町内遺跡発掘調査概要』（野洲町教育委員会　1988.3）

② 森　隆氏の教示による。

③ 篠原芳秀　草戸千軒№139「草戸千軒町遺跡出土の草履状木製品―芯板について―」　（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所　1985）

④ 「西川島」能登における中世村落の発掘調査（石川県・穴水町教育委員会　1987.3）
「日本歴史」第 421号文化財レポート『能登の中世村落』―石川県穴水町西川島遺跡群―（1983.6）

⑤ ③と同じ

⑥ 能登川町埋蔵文化財調査報告書第５集「今安楽寺遺跡」　（能登川町教育委員会　1986.3）

⑦ 昭和61年度野洲町内遺跡発掘調査概要　（野洲町教育委員会　1987.3）

⑧ ③と同じ

⑨ 「掘り出された鎌倉」新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録　（鎌倉考古学研究所　1981.8）

⑩ 潮田鉄雄　日本はきもの博物館だより「復元製作　草履状木製品は板金剛草履の芯板」　（日本はきもの博物館　1983）

⑪ ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIII－２「I・近江八幡市柿木原遺跡」　（滋賀県教育委員会・財団法人　滋賀県文化財保護協会　1986）

⑫ 四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概要13「忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要・II」　（四條畷市教育委員会　1983.3）

⑬ 史跡・城輪柵　昭和51年度発掘調査概要　（酒田市教育委員会　1977）

⑭ ④と同じ

⑮ 奈良県遺跡調査概要1984年度「榛原町福地城跡」（奈良県立橿原考古学研究所　1985.3）

⑯ 井上　正　『神道考古学講座』第四巻歴史神道期「神像と狛犬」　（雄山閣出版社　1969）

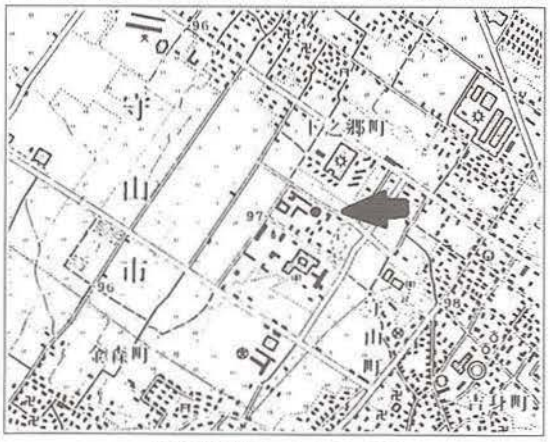
⑰ ⑯と同じ

160．吉身西遺跡の調査

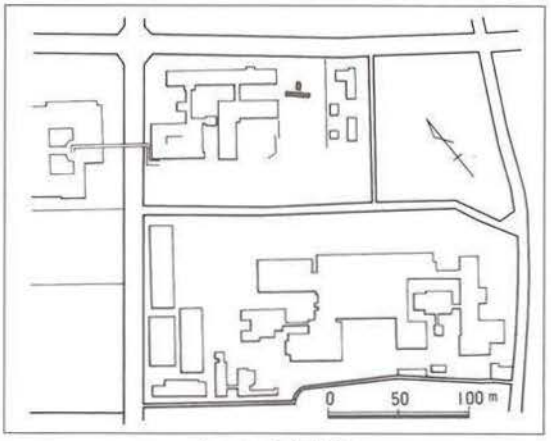
1．はじめに

吉身西遺跡は守山市守山町に位置し、集落跡・墓跡等として周知されている。当地は、遠く鈴鹿山系の御在所山を源として流れ出た野洲川が、菩提寺山と金勝山地の北端にある松籟山に挟まれた狭小な地形から、下流に形成した沖積平野のほぼ中央に位置する。現在、菩提寺山から三上山の南を通って北西に流れる野洲川は、ＪＲ東海道線を越えたあたりで北に向って流れている。この野洲川は古来、氾濫をくり返しながら、その度毎に流れを変えたことは、この地に残る条里地割が所々乱れを見せることからも窺える。『守山市史』上巻には、野洲川旧河道が６ヶ所復元されており、そのうちの１つは当遺跡の南に隣接する金ヶ森東遺跡の中心部分を通ることになる。また、北に隣接する下之郷遺跡でも、昭和60年度の調査で旧河道が検出されるなど、旧野洲川本流を中心として、多くの支流が存在したことは、現在の山賀川や守山川となってその名残りを留めていることからもわかるであろう。

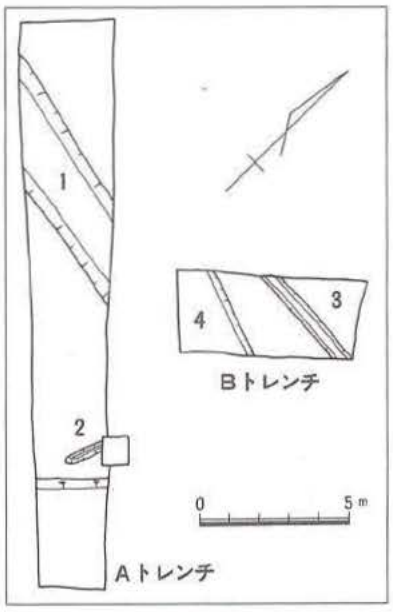
吉身西遺跡はそのような野洲川下流の三角州に営まれた遺跡で、北に下之郷遺跡、南に金ヶ森東遺跡、東に正福寺遺跡が隣接している。これら４遺跡は、幾度かの発掘調査における成果から、弥生時代中期から古墳時代前期にかけては遺構の連続性が認められ、同一集団の遺跡であろうと考えられる。吉身西遺跡を中心



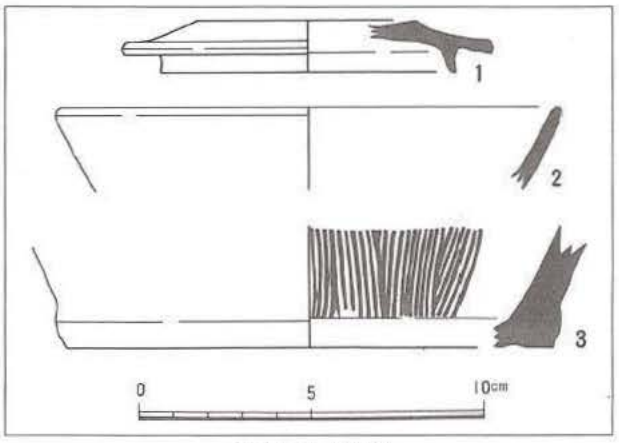
遺跡位置図　１：25,000



トレンチ位置図



遺構実測図



遺物実測図

に考えると、県立成人病センターから北方は弥生時代中期から古墳時代前期の方形周溝墓、東方は弥生時代中期の方形周溝墓が集中し、西南の方向には弥生時代後期の竪穴住居が広がっている。

下之郷遺跡は弥生時代中期の環濠と弥生時代後期の方形周溝墓が検出されている。この方形周溝墓は、同じく方形周溝墓が検出された吉身西遺跡の昭和60年度の調査地区に隣接しており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて形成された墓域と考えられる。

金ヶ森東遺跡は弥生時代中期から古墳時代後期にかけて、竪穴住居・掘立柱建物・土壙・溝・方形周溝墓が検出されている。特に竪穴住居や掘立柱建物などは、吉身西遺跡の各所で検出されている古墳時代前期の竪穴住居との関連が考えられ、吉身西遺跡から金ヶ森東遺跡にかけては、古墳時代前期にはこの付近で中心的な集落であった可能性が考えられる。

このように、今回の調査地周辺には弥生時代中期から古墳時代後期にかけての集落跡や墓域が広がっていることが確認され、今回の調査でも同様の遺構や遺物が検出されるものと予想された。

2．調査

調査地は、県立成人病センター敷地内北端に建てられている県立守山養護学校の東の空地にあたる。当地に保育施設の建設が計画されたため、それに伴う事前調査を行なった。

トレンチは、西にある養護学校の建物と平行する長さ24m、幅3m（Aトレンチ）とその中央から北東へ直角に延びる長さ10m、幅3m（Bトレンチ）を設定した。A・Bトレンチともに表土から約80cmまでは、現代に盛り土が行なわれており、その下から旧水田面が確認された。包含層は検出されず、遺構面は旧水田面下約10cm（標高約95.8m）で確認されている。

遺構は、両トレンチともに溝が2条ずつ検出された。

Aトレンチの溝は、長さ7m以上、幅2.5m、深さ0.6～0.7mの溝1と長さ1.5m以上、幅0.4m、深さ0.15mの溝2で、溝1の溝埋土中より近世の陶磁器が数点出土している。

Bトレンチでは、長さ4m以上、幅0.5m、深さ0.15mの溝3と長さ1.5m以上、幅0.5m以上、深さ0.1mの溝4が検出されたが、遺物は出土しなかった。Bトレンチの2つの溝とAトレンチで遺物を出土した幅広の溝1は、ともにほぼ東西方向に流れる形状を呈し、溝2はほぼ南北を向いている。溝4は北辺のみで南辺が検出されなかったが、あるいは溝1と同一のものかも知れない。

遺物は、溝1のみの出土である。

1は陶器の蓋である。口径8.6cm、器高1.5cmを測り、外面に乳白色の釉が施された堅致な焼き物である。水平な天井部から口縁がハの字状にのび、内側にかえりをもつ。19世紀頃のものであろう。

2は染付の碗である。口縁の端部付近の破片で、口径14.4cm、器高2.4cm以上を測る。18世紀前半と考えられる。

3は信楽焼の摺鉢であろう、底部の小片で、内面に7～11本単位の摺目が放射状に施されている。底径は14.2cm、器高は3.5cm以上を測る。18世紀のものである。

3．まとめ

今回の調査では、当初予想された弥生時代中期から古墳時代後期の遺構や遺物は検出されず、近世の溝が検出されたのみであった。遺構面より下層は、シルトに近い微細砂粒が1m以上も堆積し、当地がかつては河川の氾濫を受け続けていたことを想像させる。

（三宅　弘）